

思春期における性愛的経験の解釈

亀 山 佳 明

1. 性愛的経験と解釈

M・ミードの『サモアの思春期』*Coming of Age in Samoa* は、出版以来50年を経過したにもかかわらず、今もなお内容の清新さを失っていない。この著作において、彼女は次の二つの命題を提出したといえる。

(1) S・ホールに始まる青年期 *adolescence* の諸研究は、青年期は精神的緊張と苦悩とに支配される時期であると規定してきた。しかし「疾風怒濤」の青年期は特定の文化の下でのみ生ずるのであり、普遍的現象とはいえない。

(2) アメリカ社会に顕著である青年期の精神的不安定さは、当社会に特有な社会・文化構造上の不安定さ（たとえば価値の多元性、経済的変動、核家族制度）と対応している⁽¹⁾。

これら二つの命題を論評するには、われわれには十分な条件が備わっていない。しかしミードの著作に依拠しながら、彼女とは別の視角から、思春期 *coming of age* の性の特徴を考察し、そのことを通してこれらについて検討・補足してゆくことは許されると思われる。ミードは思春期の精神的不安定さを生じさせる要因の一つに、青年たちの性愛的経験をとり上げたが、われわれも問題を限定するために、この前提を踏襲する。それゆえ、この小論では思春期の性愛的行動と精神的緊張（苦悩）との関連について述べることにしたい。むろん、この要因のみによって青年期の特徴がすべて説明されるわけではないことはいうまでもあるまい。次に問題へのアプローチの方法を述べておこう。

次節でより詳しく述べるが、当面ここでの性愛的経験とは性愛的な意味を有する行為を指している。たとえば、青年が特定の異性に対して抱く好意は、「主観的に思念された意味」にもとづく行為といえよう。ところでM・ウェバーによれば、意味にもとづく人間の行為は外部からの観察だけでは説明されえず、意味を理解する *Verste-*

香 川 大 学

hen することによってのみ解明される⁽²⁾。確かに R・D・レインの指摘するように、われわれには他人の行動は観察可能ではあっても、彼らの経験を見ることはできない⁽³⁾。他人の経験はもとより、自己の経験すら自明であるかどうか疑問である。ウェバーは、行為者にさえ「不完全にしか意識されていない行為」も解釈によって解明されなければならないと述べ、これが「意味解釈の限界的ケース」とであると規定した。精神分析学での抑圧やニーチェのルサンチマンがこれに該当する。自己の行為の意味がなぜ行為者自身にとってすら不十分にしか意識されえないのか、これについて考える前に、有意味とはどういうことなのかについて簡単にふれなくてはならない。

了解心理学の E・シュプランガーは、W・ディルタイに依拠して、意味を部分と全体との関係にとらえた。彼によれば、「一つの価値全体の中へ構成要素として組み入れられているもの」のみが有意味的である。「意味ありとは一つの価値全体を構成し、価値全体に関係し、または価値実現を助けるところの構成要素の組織ないし関連をいう」⁽⁴⁾。部分（体験、業績、動機）は全体（生活）に関連づけられるとき意味を持つが、逆に全体との関係を失えば、意味をも喪失してしまう。

われわれの日常生活における個々の経験は、行為主体によって常に生活全体と関係づけられているわけではない。なぜなら、全体とはより高次の全体の要素を構成する部分でしかなく、個人の意識がとらえる経験とはこの部分にすぎないためである。意識の無意識による規制、個人の立場の社会的、歴史的制約、このように個人は様々な限界によって全体への到達をはばまれている。それゆえに、われわれは、自己の行為が不完全にしか意識できないのだ。ところが、これらの諸制約は行為者自身よりも、第三者によってこそ超越が可能となりやすい。たとえば、歴史上の一人物の主観的な意味連関（部分）は、後世の研究者が構成する超個人的な意味連関（全体）に組み入れられるとき、より高次の全体への関連づけが可能となる。このように、他者（と同時に自己）の行為の意味を理解するとは、高次の意味連関が把握されるときである。

ところで、意味や意味連関は「意味カテゴリー」を媒介にするときにのみ可能となるが、それは、ゲシュタルト心理学が明確にしたように、われわれの知覚すらがゲシュタルト（カテゴリー）を介するとき外界を知覚しうるのと同じことである。解釈とは、対象にこのようなカテゴリーを運用させる過程のことである。意味を成立させるカテゴリーには自然言語に代表される素朴なレベルのものから、研究者によって構成される洗練されたものにいたるまで、多様なカテゴリーが存在する⁽⁵⁾。われわれは日常生活を有意味化するために自然言語に依存しているが、この自然言語では部分（行為）をより高次の価値全体へ関連づけえないことがある。自己から隠された意味を把握するためには、自然言語とは別なカテゴリー、たとえば研究者によって構成された二次的なカテゴリーを必要とせざるをえない。われわれがこの小論で問題とする青年の性愛的経験とは、先のような行為者自身にすら自覚しえない（すなわち隠された意味をもつ）行為であるため、われわれがこの行為を解明するには、二次的なカテゴリー

思春期における性愛的経験の解釈

（フロイト理論と社会構造論）を通して解釈していく以外にはない。

性愛的行動は、個人の意識から隠された動因によって発動されるが、フロイト理論は無意識というカテゴリーによって性愛的行動のより深い意味連関を構成する⁽⁶⁾。また、どのような性愛的行動も選択すべき対象を社会・文化的に規定されているが、このような諸規定は個人の主観というフィルターを通して個人の行動を左右する⁽⁷⁾。社会構造論は行為者自身にはとらえきれないこの暗黙裡の制約を明らかにし、より高次の関連づけを可能とする。

以上によりわれわれは小論の問題の設定と方法を明らかにしたと思われるので、次にはミードの二つの命題をそれぞれ2節と3節において検討・補足してゆくことにしたい。

2. 思春期の性愛拡散と精神的緊張

われわれは、まずフロイトの性についての一般理論により思春期の青少年に特徴的な性愛行動を構成し、次にこの特徴がサモア社会の少女たちにも認められることを示したい。

フロイト理論は幾つかの理論的特性から成り立っているが、ここで参照するのはそのうちの性理論であり、それは次の3点に要訳できる⁽⁸⁾。

(1) フロイトは人間の行動の主要な動因を性欲動に求めた。性欲動とは単に生理的であるだけでなく、身体・精神の両面にかかわる一種の性的エネルギーである。この性的エネルギーは多様に変換することが可能（たとえば昇華）であり、この点で彼の性理論は汎性欲的性向を持つ。しかしこの定義は広義でありすぎるため、この小論では性の定義を限定しなければならない。そこでわれわれは性愛的経験を次のように特定化する。性愛的経験とはある対象（異性・同性・事物）と情動的な愛着関係を形成維持しようとする行為や態度のことである⁽⁹⁾。それゆえ、昇華のような情動的要因が目的合理的・価値合理的行為へと変換する場合は、この定義から除外しよう。

(2) フロイトは性欲動は主体の成長にともなって体制化（特定の様式へと形式化）されるという発達論を主張した。人間は幼児から性欲動を所有しており、彼は失われた愛の対象（母親）との再度の合一を達成するために、性欲動を体制化せざるをえない。思春期から顕著となる身体・精神的諸変化は、幼年期の性欲動の再浮上化である。幼年期の性体制（口唇期、肛門期、性器期）は挫折し、潜在期を経た後に思春期で再発現するわけである。これらの各段階は一階程の成就の後に次の階程に進むわけではなく、各階程が重複しながら同時に存在している。それゆえに退行が生ずるのである。思春期の性愛も退行的な性格を持っている。

(3) 先の2点と関連するが、人間の性欲動は多方向に拡散する性格を有する。幼児は失われた愛の対象との幻想を介しての合一をもとめるが、このとき彼は身体の各部位を使用して快感を獲得しようとする。この傾向をフロイトは幼児期の多形態の倒錯

polymorphous perversion とよんだ。人間の性欲動はこの性格を終生失うことがない。性欲動が向けられる性対象は多種多様な存在が対象にされることが可能であるし、性欲動がめざす目標（緊張の軽減）も異性との性器的結合による快感の獲得だけではなく、身体各部位や想像力の駆使などによる全身を使用しての快感の獲得をめざしうる。つまり、性対象も性目標も本能的に固定されておらず、多様に变化可能である。

われわれは、フロイトによって構成された以上の指摘をカテゴリーとして使用することにより、思春期の性愛的経験の意味を解釈することができるだろう。思春期の性欲動は青年たちを激しくつき動かすが、彼らがとる性愛的行動をとらえるには、性的拡散の方向を明らかにする必要がある。先にみたように、人間の性対象は特定の対象（個別性）に固執する一方、不特定対象（一般性）が選ばれる。また性目標も性器的結合（限定性）が志向されるだけでなく、全身からの快感の獲得（無限定性）が目指される。このため、われわれは図1のように性対象の軸（個別性対一般性）と性目標の軸（限定性対無限定性）を交差させることにより四つの象限を構成することができる。この四つの象限をかりに結合的関心、向上的関心、道具的関心、溶解的関心とよんでおこう⁽¹⁰⁾。これら四つの関心は、性愛的行動が拡散する方向を示しているが、次にそれぞれがどのように行為者に経験されるか、について述べておく。

(1) 結合的関心——特定の対象（異性、同性）が性愛的対象として限定され、主体は対象に向けて無限定（全身）的な愛情を抱く場合の関心の様式である。彼の究極の願望は対象との性器的結合にあるのではなく、愛情による結びつきの確認、とりわけ相互の愛情をたしかめ合うことにより心的な連帯を実現することである。思春期の結合的関心は、愛情の相互の確認にいたることは稀であり、主体の側の一方的な思い込みに陥りやすい。この時期に特有な異性への憧憬（熱中）、プラトニックな恋愛、片恋などがこれにあたる。

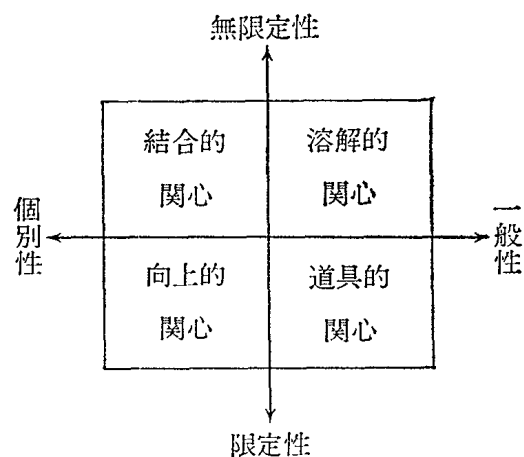


図1 性愛拡散の類型

「他人の肩越しに、正面に坐っている少女を、怕いような嬉しいような気分でそっと注視した。連れと話しながら、ときどき彼女は焦点の定まらぬ視線を上方に放ったが、そのときあらわれる瞳孔ほど、なんの奇もないその姿を周囲から判然と区別しているものはなかった。それは人々の背後にあるぼくの視線を制御し、思わず目を伏せさせるほどの力をもっていた。……そのような霧の帳が、時とともにぼくの憧憬をつのらせ、その姿をさらに神秘化させていったことは争えない。」（北杜夫『幽霊—或る

幼年と青春の物語』)⁽¹¹⁾

(2) 向上的関心——特定の対象（友人）に対して、限定的な愛情（友情）が抱かれるときの主体の関心のあり方である。思春期における友人への強い愛着は、それと表裏をなす自己愛（ナルシズム）と分かちがたい。ナルシズムとは自己が最も充足していた状態を理想とし、そのときの再実現の要求である。フロイトによるとナルシズムとは母親と一体化していた幼年期の状態への回帰である。思春期における自己の不完全さの意識は、当然ながら新たな完全状態（理想我）に向けて青少年を駆り立てずにはいない。彼が理想の体现者と承認しえた人物は、彼にとっての積極的な同一化の対象とされる。思春期における友人への強い愛着と理想化とは、こうした関心の表現されたものである。

「時日がたつにつれて、僕たちはお互いに相手の中に高麗彦の影を認めあうことに、ある喜びを感じはじめた。高麗彦と歩いた路を歩き、高麗彦と行った喫茶店に入り、そして馬跳び遊びのように代り番に高麗彦になりあった。……全く些細なことだが、藤井がコーヒーをのむときの茶碗の持ち方まで僕らは真似した。……こんな風にして高麗彦のイメージは日とともに僕らの心に理想化されてうつってきた。」（安岡章太郎、「悪い仲間」）⁽¹²⁾

(3) 道具的関心——思春期になって顕著に現れる身体的特徴は第二性徴としての性器の発達に代表される。性器への刺激による快感の獲得の経験は、主体に驚きをもたらす。この種の快感は特定対象に固定される必要はなく、特定の部位の刺激から獲得可能である。最も分かりやすい例は思春期の「自慰」の経験であろう。

「ある夜、同じ空想に耽っていたら、突然ペニスの根元から何かがこみ上げて来たので、私はあわてた。体中に異常な快感が漲り、生れてはじめて射精を経験した。……私の体も心もその快感を受け入れる状態から遠かった。こんな快感があつてよいものか、という恐怖があった。」（大岡昇平、『少年—ある自伝の試み』）⁽¹³⁾

(4) 溶解的関心——これは、作田啓一が青年期を特徴づける感情的態度として注目した溶解的指向と対応している。この傾向は性愛的経験においても生じやすい。主体にとって対象は何であろうとも、当の対象と自己を隔てる境界が不分明となり、自己が対象のうちに溶解するときの経験である。自己の全体が対象のうちに溶け合うとき、主体は全身的な快感（一体感）を味わう。思春期には自然の事物が異なった様相のもとに生き生きと経験され、この自然の中で青年は夢想に耽るうちに、一種の法悦状態に陥る。思春期を描いた文学作品には、このような経験の記述が数多くみられる。

「ぼくは茫然とかたわらの岩によりかかると、大空一杯に陣をはる星座の群を見まわした。すべてが魂を魅する妖しげな美しさであった。……南天には蝎座がくねった姿態をのばし、殊にアンターレスが妖しいまでに息づいていた。そして宇宙の崇高を凝縮したかのような天の河はユピテルの召集をうけた神々が天の宮殿へいそいだ道筋をそのままに示していた。とめどない放心と酩酊とがぼくを包み込んだ。」（北杜夫・

前掲書)⁽¹⁴⁾

以上の四つの関心は思春期の性が拡散する方向を示している。各々の関心は他の関心と方向を異にしているため、関心が一方から他方へと揺れ動くとき、彼は心的な緊張や不安を経験せずにはいないだろう。たとえば、結合的関心と対極に位置する道具的関心への動揺は、思春期に特徴的なプラトニックな恋愛と性感帯の刺激から獲得される快感への熱中との間の動揺として生ずる。「初めて女性の口唇を知ったことに彼は深い歓びを感じた。……機会さえ恵まれれば、彼は繰り返し繰り返し慶子と口唇を合わせたかった。けれどそれは彼女が好きだからなのか、と問われるとなんと答えればよいのか迷ってしまう。そんな苛立ちと不安に揺れ動く明史を……」(黒井千次『春の道標』)⁽¹⁵⁾。ここでは明らかに一方から他方への移動が精神的緊張や不安を生起させている。また、同様にして、向上的関心と溶解的関心も相互に対極に位置しており、これらは青年の友人への愛着と孤独を求める行動との間の動揺として現れやすい⁽¹⁶⁾。

このようにこれら四つの関心への時空間内での多方向的な拡散は、行為者本人にとっては矛盾として明確に自覚されにくい。なぜならフロイトが述べたように、多形態の性倒錯は無意識に支配された行動であるからだ。行為者の経験する心的緊張は意識と無意識との葛藤から生ずる。人間はその生育の事情から、動物と異なって本能に従って生きることとはできない。そのため本能に代替する安定した世界、文化を形成させざるを得なかった。この文化は、人間が自己の性欲動を自ら断念＝抑圧することと引きかえに獲得した第二の自然である。そのため文化的存在である人間は、抑圧によって意識と無意識という心的な矛盾を自己の内にかかえざるを得なくなった。幼児の多形態の性倒錯に由来する思春期の性的拡散は、この意味で文化的存在、無意識を有する人間に必然的な傾向であり、それゆえにこれにより生ずる心的葛藤は未開と文明とを問わず人間に必然的であると考えられる。

M・ミードはその著作の中でサモア社会の思春期の少女たちの性愛的行動について詳しく報告している。それによると、彼女らにも性的拡散から生ずる同性愛や自慰、友人との強い同一化の実例が数多く存在している⁽¹⁷⁾。この報告から、われわれは先の理論的推定の正当性を確認しうる。確かに「青年期」(アドレッセンス)は近代西欧社会で発明された「制度」であった。性的同一性をめぐる精神的緊張も、自我同一性の探求にともなう苦悩の一構成要因である。しかし、このことは逆に未開社会における思春期の性愛的行動には精神的不安や緊張がともなわない、ということではない。未開一文明の相違にかかわらず、人間が文化的存在である以上、青年の性愛的行動は精神的な緊張を生み出すはずだ。ミードは文化型の差異と性愛的行動の差異との対応を強調するあまり、この共通性については明確に述べているとは思えない。未開と文明との相違から生ずる性愛的行動及び精神的緊張の差異は次章で述べる「過剰抑圧」の差異と考えるべきだろう。

3. 性肯定社会の構造的緊張

前節で述べたように、思春期の性は多方向に拡散しやすいが、どの文化の下においても拡散を当然なものとして受容しているわけではない。なぜなら、拡散の当然視や奨励は、異性との性器的結合による次世代の産出、という社会存続に不可欠な機能の達成を不可能とするからである。どの社会も結婚制度による異性との性器的結合を強要せざるをえない。近代西欧社会（アメリカも含めて）において制度化されてきた、ロマンチック・ラブと結婚制度との統合は、こうした強要の一形態であろうが、この統合はある意味で困難さを隠し持っている。というのも、前節の図式で示したように熱愛と性器愛とは対極に位置しており、相反する性格のものだからである。また、「サモア社会とわれわれの社会との顕著な差異のひとつはサモア人には感情が、なかでも性感情が特殊化されていない点である」とミードが述べているように⁽¹⁸⁾、愛情をともしなわない性関係や結婚が当たり前のこととされている。この社会では、われわれの社会とは逆に、性器愛への拡散が許容されている反面、プラトニックな恋愛が異常視されている。

このようにどの文化の下にあっても、異性との性器愛的結合は暗黙裏に強要されるが、そこに至る過程は多様である。それゆえ文化のパターンの相違は、思春期の性愛的行動を異なったものにするはずである。そこで文化型による性愛的行動の差異を分かりやすくするために、次のような類別を行ってみよう。つまり、当該の社会の性文化（文化目標）が性を肯定的に定義するか否か、また異性への性愛的行動を実現する制度的ルート（制度的手段）が、青年たちに開放されているのか否か、これらをそれぞれ縦軸と横軸にとるなら、図2の四つの行動型が構成されるだろう。これらをそれぞれ、充足型、早熟型、神経症型、強迫型、と名づけ、それらの各々について簡単な説明を行っておこう。

ミードの報告に詳細に記されているように、サモア社会の性文化は性を人間にとって重要な欲求と規定し、「誰もが性のことに夢中」になっている。思春期の不特定の異性との性愛的経験（性器的結合をともしなう）は大切な実験として許容されている。このような点からみて、この社会の青年たちは充足型の性愛的行動型をもっているといえる。

性文化が性を否定的に規定（たとえばキリスト教にみられる原罪視）しながら、にもかかわらず制度的手段の点では比較的ルートが開放されている場合、青年は性的知

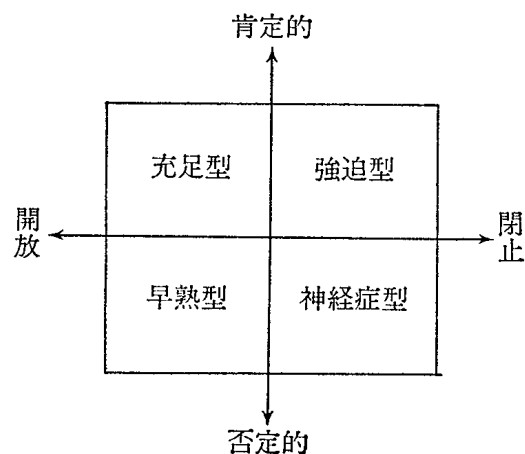


図2 性愛的行動の類型

識や経験を容易に蓄積することができる。このような社会での青年たちの性愛的行動はこの意味で経験の先行＝早熟型となる。P・アリエスが記述した西欧中世の社会は、子どもたちを前にして猥談をしたり、幼児の性器への愛撫を行ったり、あるいは年若い少年の誘惑などの行動に寛容であった。こうした「慎みのなさ」は、青年たちの性的社会化を経験の先行によって達成させるはずである⁽¹⁹⁾。

第三のタイプの性愛的行動の型は、性文化の面で性を否定的に規定するだけでなく、制度的手段の次元においても実現のルートが閉ざされている社会での行動型である。それをここでは神経症型と名づけた。「キリスト教とブルジョアが支配する近代西欧には性を敵視する症候群が発見できる」と述べられているように、ブルジョア的謹厳さはフランス革命を指導した啓蒙主義と結びついて「性の最大限の抑圧された社会」を実現させた。たとえば自慰すらもタブー視され、ジャック・ソレは「ブルジョア的な地獄——自慰」とよんでいる⁽²⁰⁾。このような強い性抑圧は、青年たちの性愛的行動を神経症的性格のものに陥れるだろう。清教徒風のモラルを色濃く残したアメリカ社会からやってきたミードが、それと対極のサモア社会の少女たちの性愛的行動に驚愕し、と同時に過剰なほど讃嘆したのも理由のないことではない。

第四のタイプは性文化の上では肯定的でありながら、制度的手段の次元で実現ルートが閉ざされている社会での性愛的な行動型である。このようなアンバランスな社会での行動型を強迫型とよぼう。のちに詳細に述べるように、性目標と制度的手段とのずれは、青年たちの性愛的行動に強迫的傾向を与えずにはいないためである。われわれが住む高度に産業化された社会は多少の差はあれ、このような行動型をとらせる社会である。

社会構造と文化構造とのソゴから生ずる強迫型について詳しく述べるまえに、われわれは文化構造上の矛盾について少し触れておかなければならない。ミードは、多元的価値観をもつ社会においては、青年たちに価値の一貫性を保障しえないために、また選択という難題のために、緊張を生起させやすいと述べた。このことは性愛的行動においても該当する。青少年たちは多様な下位文化群に日常接触しているが、性にかかわる行動選択にあたって、そのどれかに従って定義を下さないわけにはいかない。性文化とは、主要には「性知識」と「性モラル」から構成されているが、この二つの要素がもつ両極性によって、それらの下位文化群を仮に図3のように類別してみよう。すなわち、性知識（縦軸）は実感レベルの個人的知識から、科学的、一般的レベルの知識によって、また、性モラル（横軸）は禁欲主義と快楽主義によって、それぞれ分別しうる。青年たちが接触する主要な下位文化には、学校文化、家庭文化、仲間文化、大衆文化が考えられるが、これらは図3のように類別される。

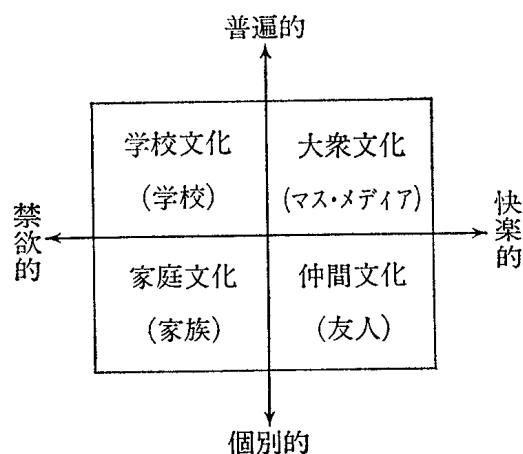
これらの四つの下位文化は、現実には混淆して経験されるが、分析的に考えるならば、図3から明らかなように、互いに相入れない原理によって支えられている。先の大岡昇平の自伝の記述にみられたように、一昔前までは、自慰という性愛的行動は青

思春期における性愛的経験の解釈

少年たちを苦しめた難題であった。学校を中心とする科学的・禁欲的文化は、自慰は身体、神経上、害悪をもたらすと規定するが⁽²¹⁾、仲間たちの間では当然なものと考えられていた。学校文化と仲間文化は性愛的行動の規定においても反目した（第2象限の学校文化と第4象限の仲間文化は対極に位置している）。同様のことは家庭文化と大衆文化との間にも存在する（第1象限と第3象限）。このように、子どもは相入れない文化を有する下位集団に地位をもつため、各地位にとまなう規範的要求は矛盾を生じさせる。同一の状況（たとえば、自慰）は、常に相両立することのない定義によって規定され、行為者はそのどれに従って行為すればよいのか迷わざるをえなくなる。A・ゴッフマンはこうした状況規定のずれが生み出す精神的緊張を、「困惑」embarrassment とよんだ⁽²²⁾。多様な文化へのコミットメントは、性愛的経験においても困惑を体験させずにはいない。

さて、強迫型の性愛的行動は以上の困惑とは別な仕組みから生ずる。それは、先述したように文化構造と社会構造とが相互に対応しておらず、両者間にずれが存在するせいである。1960年代以降に顕著になったように、西欧社会を席卷した性解放（自由化）は、青少年の性意識や行動にまで影響を及ぼさずにはいなかった。西欧キリスト教社会は、信仰の衰退（世俗化）とともに、近代ヒューマニズムの思想が支配的となった。近代ヒューマニズムは、一般的に人間の諸欲求を善なるものとして承認する。それゆえ、性欲望も当然ながら公認されなくてはならなかった。また、技術の革新は避妊具にもおよび、ピルに代表されるように、避妊を比較的に容易にした。主にこれら二つの要因から、性の解放という社会・文化的趨勢がもたらされた。性は「生殖の性」と「快楽の性」に分離され、前者から後者へと力点が移動した。そこには明らかに快楽主義的傾向（ヘドニズム）の横行がみとめられる。

快楽主義の色調を色濃くした現代の性文化は、「性肯定文化」といえるが、この傾向は青少年たちの下位文化群にも浸透する。たとえば、性教育の要請は、こうした性肯定的傾向へのリアクションと考えられる。「楽しみ道徳」⁽²³⁾の下位文化群への浸透は、必ずしもその実現の通路の開放をとまなっていない。現代社会が要請する長期間に及ぶ現実社会からの隔離的社会化（学校生活）は、性における快楽主義とは両立しえないためである。程度の差こそあれ、目標実現のルートは閉ざされざるをえない。一方で快楽主義によって刺激され、他方で実現のルートが閉ざされるとき、青年たちはディレンマに立たされる。マートンは、文化構造と社会構造とのずれからアノミーが



* ()内はメディアをあらわす

図3 下位文化の類別

生ずると説明したが⁽²⁴⁾、この図式に従えば、青年たちのディレンマは性的アノミー（緊張や不安）を経験させるだろう。たとえば、ミードがアメリカの青年たちにみたデート文化とペッティングという性愛的行動は、こうしたディレンマから生ずるアノミー軽減の妥協策であったろうし⁽²⁵⁾、50年代のキンゼイ報告にはじまる自慰無害説の科学的保障も、このような社会・文化的背景から出現すべくして出現したと考えられる⁽²⁶⁾。

社会構造上の矛盾から生ずる性的アノミーは、青年たちの性愛的行動に「強迫的性格」を与えずにはいないが、性のうずきと苦悩は高度産業社会に特有な「過剰抑圧」（マルクーゼ）でもある。H・マルクーゼは文化形成に必然的な抑圧と当該社会の支配形態に特有な抑圧とを区別し、前者を原（普遍的）抑圧、後者を過剰抑圧とよんだ⁽²⁷⁾。サモア社会にもアメリカ社会にも原抑圧は存在しており、どちらの社会においても原抑圧から由来する精神的緊張は青年たちに課されるはずである（前節で既述した）。しかし、図2で明らかなように思春期の性愛的行動が両社会で別象限に位置づけられているが、この差異は原抑圧からではなく過剰抑圧の質と量の違いから生じていると考えられる。当然のことながら高度に産業化された社会における青年たちの方が、未開社会の若者たちよりも過剰抑圧の量が加重されている。なぜそうでなければならないのか。この疑問にはミードや作田啓一とともに次のように答えられる⁽²⁸⁾。絶え間ない精神的緊張や苦悩に耐えうるパーソナリティーは、不安定な社会・文化構造と機能的に対応しているためである。あるいは、性における業績主義（性愛の強迫的探求）と仕事における業績主義（強迫的労働）とはパラレルであるから、といってもよからう。

〈注〉

- (1) Mead, M. 畑中幸子、山本真鳥訳、蒼樹社、1976年。
- (2) Weber, M. 清水幾太郎訳、『社会学の根本問題』、岩波書店、1972年。
- (3) Rain, R.D. 笠原嘉、塚本嘉壽訳、『経験の政治学』、みすず書房、1973年。
- (4) Spranger, E. 原田茂訳、『青年の心理』、協同出版、1973年。
- (5) ここから二つの解釈論的立場が区別される。一方は日常的カテゴリーに注目するものであり、究極的にはこのカテゴリーがいかに形成されるかにまでいたる（現象学的立場）。もう一方は、二次的に構成されたカテゴリーの導入を認める立場である（解釈学的立場）。小論は後者の立場に立っている。
- (6) フロイト理論は解釈学でもある。Ricoeur, P. 久米博訳、『フロイトを読む』、新曜社、1982年。
- (7) 井上俊、「日常生活における解釈の問題」、仲村祥一編、『社会学を学ぶ人のために』、世界思想社、1975年。
- (8) フロイト理論の主要な特徴については別のところで述べたことがあるので、ここではそれを前提として性理論にのみ言及した。拙稿、「抑圧と文化の理論（S・フロイト）」、作田啓一、井上俊編著、『命題コレクション、社会学』、筑摩書房、1986年。なおフロイトについては人文書院版『フロイト著作集』（1～11）を参照した。

思春期における性愛的経験の解釈

- (9) 『社会学小辞典』(有斐閣, 昭和52年)によると, 性愛(the sexual)を次のように定義している。「性愛とは性的欲求に基づく愛情ないし愛着をいう。性欲に近接した衝動的なものから, 高度に精神化されたものまで, さまざまな度合いがある。また対象の面からみれば, 基本的には同性愛と異性愛に分かれる」。われわれの定義はこの定義に近いが, 対象の枠をさらに広くとり, 事物や自然をも加えている。
- (10) これら四つの名称は作田啓一の四つの指向から借用した。ただし作田の四つの指向は指向の一般体系であり, 小論の場合は性愛的行動というより具体的次元での行動を対象としているために「関心」とよんでいる。作田啓一, 「青年期の感性」, 岩波講座『子どもの発達と教育』6, 岩波書店, 1979年。
- (11) 新潮社, 1975年, p. 170。
- (12) 『質屋女房』, 新潮社, 1967年, p. 64。
- (13) 筑摩書房, 1975年, p. 176。
- (14) 前掲書, p. 194。
- (15) 新潮社, 1984年, pp. 15~16。
- (16) Bühler, C. 原田茂訳, 『青年の精神生活』, 協同出版, 1967年。
- (17) 例えば自慰や同性愛についてのミードの調査では, 前者は25人のうち22人が, 後者については, 22人中17人という数字を上げている。Mead. 前掲書, p. 239。
- (18) Mead, M. 前掲書, p. 193。
- (19) Aries, P. 杉山光信, 杉山恵美子訳, 『＜子供＞の誕生』, みすず書房, 1980年。
- (20) Solé, J. 西川長夫, 奥村功, 川久保輝興, 湯浅康正訳, 『性愛の社会史』, 人文書院, 1985年, pp. 136~148。
- (21) わが国における啓蒙的性教育の草分けといわれる星野鉄男の『性教育の実際』にも次のように記されている。「手淫は……健全な性器官の発育のためによくなくないこと, 神経系の健康にもよくなくないこと……」, 衛生文化思想普及会, 1931年, p. 67。
- (22) Goffman, A. “Embarrassment and Social Organization”, *American Journal of Sociology*, 62 (1956)。
- (23) Wolfenstein, M. “Fun Morality: An Analysis of Recent Child Training Literature”. Mead, M. Wolfenstein M. ed. *Childhood in Contemporary Culture*. Chicago Univ. Press, 1955年。
- (24) Merton, R.K. 「社会構造とアノミー」, 森東吾, 森好夫, 金沢実, 中島竜太郎訳, 『社会理論と社会構造』, みすず書房, 1961年。
- (25) Mead, M. 田中寿美子, 加藤秀俊訳, 『男性と女性』上・下, 東京創元社, 1961年。
- (26) 金塚貞文, 『オナニズムの秩序』, みすず書房, 1982年。
- (27) Marcuse, H. 南博訳, 『エロスの文明』, 紀伊國屋, 1958年。
- (28) 作田啓一, 「現代の性—フリー・セックス批判」, 松田道雄編, 『共同討議, 性』, 筑摩書房, 1971年。